

津軽方言の命令表現

——命令形と丁寧命令形および希求（依頼）について——

坂 本 幸 博

1. はじめに

命令表現は聞き手の動作を話し手が要求するものであり、それは「命令」と「依頼」とに大きく二分される。それらの違いについて安達太郎（2002）では、

両者は截然と区別されるものではなく連続するものであるが、〈命令〉が聞き手にその行為の実行を強制するのに対して、〈依頼〉には聞き手に対する強制力が欠けており、あくまでその実行の諾否については聞き手に決定権があるという違いを認めることができる。（p. 43）

と聞き手に対して強制力を持つか持たないかという観点から分類されている。また阪田雪子（1989）では、

話し手が相手に要求する事柄としては、大きく分けて命令するものと依頼するものになるであろう。つまり、「命じる・言いつける・指令する・禁じる」などの言葉に象徴されるものと、「頼む・願う・乞う」などの言葉に象徴されるものとである。しかしながら、この区別は前述したように話し手の心理的な要因によって左右される面が大きく、本来、前者の命令に属するものであっても、相手を立てる場合などには、控え目で丁寧な表現が用いられ、依頼表現に近づく。（p. 310）

のように命令と依頼の違いは表現の差であると述べている。

これらの共通語を対象とした研究では、命令表現を広い意味での要求と捉え、動詞の命令形に限定せず、疑問表現や動詞終止形＋断定といったさまざまな形式を対象として考察を行っている。

一方、津軽方言を対象とした研究で、命令表現を中心に論じたものは管見の限りでは存在せず、概説書で部分的にふれられている程度である。そこで本稿では、津軽方言の命令表現を、坂本幸博（2003）で設定した命令形と丁寧命令形を使用した表現とそれらに対応する禁止表現、さらに希求（依頼）表現⁽¹⁾を含め、それらを包括的に述べることを目的とする。なお、以後本稿で使用する活用形の名称は、特に断りがない限り坂本幸博（2003）において設定した活用形の名称である。

2. 調査法とインフォーマント

調査は質問形式による面接調査を行った。インフォーマントは以下の通りである。

●A 氏：男性（50 代）南津軽郡大鰐町在住

父親の出身地 青森県五所川原市：母親の出身地 青森県南津軽郡大鰐町

●B 氏：女性（50 代）南津軽郡大鰐町在住

父親の出身地 青森県黒石市：母親の出身地 青森県弘前市
二名ともに津軽方言のネイティブスピーカーである。

3. 得られた形式

形式の収集に当たっては、まず動詞の命令形を示し、それを中心として、上下関係や柔らかさ、厳しさといったニュアンスを付加することにより、さまざまな形式を導き出した。その後、補足として阪田雪子（1989）

で取り上げている共通語の形式⁽²⁾を示し、津軽方言であればどのように表現するかを質問した。その結果、(1)～(8)の形式が導き出された⁽³⁾。以下「カグ(書く)」を例にして示す。また、命令形や丁寧命令形といった活用形が、どのような活用語尾をとるかということは、「4. 活用形」にて示す。

- (1) 命令形(活用形) で表されるもの
カゲ (+ジャ／ヤ)
- (2) 禁止形(活用形) で表されるもの
カグナ (+ジャ／ヤ), カグスナ (+ヤ／ノ)
- (3) 禁止(禁止形以外) で表されるもの
カゲバマネ (+ジャ／ヤ)
- (4) 丁寧命令形(活用形)+へ(助詞) で表されるもの
カゲへ (+ジャ／ヤ／ノ), カゲヘンガ (+ノ)
- (5) 希望形(活用形)+へ(助動詞命令形) で表されるもの
カギへ (+ジャ／ヤ／ノ), カギヘンガ (+ノ)
- (6) 丁寧命令形(活用形)+へ(助詞)+ス(丁寧助動詞)+ナ(禁止) で表されるもの
カゲヘスナ (+ヤ／ノ)
- (7) 希望形(活用形)+へ(助動詞命令形)+ス(丁寧助動詞)+ナ(禁止) で表されるもの
カギヘスナ (+ヤ／ノ)
- (8) 希求(依頼) で表されるもの
カイデケ (+ジャ／ヤ／ノ), カイデケロ (+ジャ／ヤ／ノ)
カイデケレ (+ジャ／ヤ／ノ), カイデケへ (+ジャ／ヤ／ノ)
カイデケネ(べ)ガ (+ノ), カイデケラエネ(べ)ガ (+ノ)
カイデケヘンガ (+ノ), カイデホス (+ジャ／ヤ／ノ)

それぞれの形式に後続しうる助詞も付属する形で記述した。津軽方言の命令表現に後続しうる終助詞は、「ジャ・ヤ・ノ」の3種類である。佐々

木隆次（1988）ではそれぞれを次のように記述している。

⑧〈軽い断言〉ジャ

基本的には自分の判断したことを軽く断言するときに発する語である。(p. 679)

⑭〈詠嘆・念押し・同意希求〉ネシ・ノ・ナ

これらは相手に詠嘆的に念を押したり、同意を期待して発する語である。(中略)「ノ」は「ネシ」に比して丁寧度は少し弱い、親愛性を持っていて、中待遇である。本来、女性語と思われるが、現在は男性も多く使用する。(中略)「ナ」は下待遇である。(p. 683)

⑰〈言いきかせ〉ヤ(上)・ヨ・イァ(下)

これらは相手に自分の考えていることを言いきかせるために発する語である。(p. 684)

佐々木隆次（1988）がここで述べているように、ノとヤはそれぞれ交替する要素を持つ。本稿ではそれぞれ、ノとヤで代表させているが、交替させることも可能である。その場合には、位相差との関わりが生じるが、本稿では形式的なことを中心に述べるため、このことには深入りしない⁽⁴⁾。

また、(4) 丁寧命令形（活用形）で表されるもの、(8) 希求で表されるもの、に関しては、次に示す通り、動詞基本形の部分（カグ）が否定形（カガネァ）に交替することも可能である。その場合 (2) 丁寧命令形（活用形）であらわされるもの、は断定の「デ（基本形ダ）」を介してそれぞれの要素を後続させる。

(4) カゲヘ→カガネァ^ンデヘ

(8) カイデケ→カガネァ^ンデケ

以下のものは、阪田雪子（1989）で示されている共通語の形式を示したが、津軽方言において、それに対応する形式が得られなかったものである。しかし、中には、形式では対応しないが、意味的には (1)～(8) で示した形式に該当すると思われるものが存在する。

それらと (1)～(8) の対応関係も示しておく。

阪田雪子 (1989) の形式	本稿の形式
終止形 (しっかり見る) ～た (さあ, 書いた書いた・ちょっと待った)	(1) に対応
～なさい / お～なさい (お食べなさい) ～ごらんなさい (やってごらんなさい)	(4) に対応
お～ください (お書きください)	(5) に対応
連用形+て (電話して) ～ておくれ (来ておくれ) ～いただきたい (やっていただきたい) ～もらいたい (見てもらいたい) ～て頂戴 (読んで頂戴) お～願えませんか(お書き願えませんか)	(8) に対応

次の5形式は意味的に対応する形式も存在しないと思われるものである。

●～たまえ／～くれたまえ (早く書きたまえ／書いてくれたまえ), ●終止形+こと (入れておくこと), ●～しましょう (静かに歩きましょう)⁽⁵⁾, ●語の意味にゆだねるもの (一時停止・天地無用), ●反語的な用法 (馬鹿いえよ)

4. 活用形

以下、本稿では動詞の活用形が問題となる項目が存在するため、動詞の活用表を示す。例として「I-1 型動詞 アガル 'aɸar-u」のものを示す。左から、語幹、活用語尾、後続形式の順に並んでいる。具体的な語形は、「語幹+活用語尾+後続形式」の順に並べることによって得られる。ほとんど変化しない部分を語幹とし、変化にあずかる部分を活用語尾と考える。活用語尾の後ろにそれぞれ活用形の名称を示す。語幹を「ほとんど変化しない」というように述べたのは、語幹末の子音を複数設定したためである。通常は語幹末の子音は r であるが、活用語尾との対応によって q や ø に交替するというように考える。語幹末の子音と活用語尾との対応

は、活用語尾に/a~i~u~e/をとる場合には/r/となり、-ø-の場合には、否定形・禁止形ではøとなり、過去形では/q/となる。

4. 1. 活用表⁽⁶⁾

【表 1】

$\begin{matrix} \text{'a} \end{matrix}$ $\begin{matrix} \text{a} \end{matrix}$ $\begin{matrix} \{ \text{r-}, \\ \text{(*_Q, **_ø-)} \} \end{matrix}$	-a- (志向形)	$\begin{cases} -\emptyset-, -\delta- \\ -\text{'eru-}, -\text{heru-}, -\text{saru-} \end{cases}$	意志・勧誘 1 受け身, 使役, 自発(可能)
	**ø- (否定形)	{-nø-	打ち消し (-ba-後続で義務)
	-i- (希望形)	{-tø-	希望
		{-teŋaru-	願望
		{-su-	丁寧
	*-ø- (過去形)	{-naŋara-	継続
		{-ta-	過去
		{-tari-	並列
		{-te-	動詞に続く (-maru-後続で完了, -ke-後続で希求)
		{-te-ra(cjaa)-	進行
	-u- (基本形)	{-ø-	言い切り, 名詞に続く
		{-ḍa-	断定 (-ba-後続で条件 1)
		{-inta-	様態・比況・推定
		{-be-, -bjon-, -gasa-, -ne-	推量
		{-be-, -besu-, -ja-	意志・勧誘 2
		{-ga-, -na-, -ba-	疑問
	*-ø- (禁止形)	{-hande-, -baqte-	接続 (-hande-は原因・理由, -baqte-は逆接)
		{-na-	禁止
		{-ni-'i-	可能
		{-e- (仮定形)	条件 2
	-e- (命令形)	{-ø-	命令
	-c- (丁寧命令形)	{-he-	丁寧命令

5. 命 令

5.1. 命令形

ここでは、命令形(活用形)によって表される命令表現を検討する。

- (1) ミンナ アズマレ (みんな集まれ)
- (2) ワモ イグハンデ オメモ イゲ (私も行くから君も行け)
- (3) コツカラデネアクテ ソズガラ ミレ (ここからではなくて、そこから見ろ)

基本的に共通語と同じであるといえる。(1)のように号令をかける場合(上から下に)に使用したり、(2)のように仲間(同等)に対して使用することができる。

これらのことから、津軽方言の命令形(活用形)によって表される命令表現は、同等以下に対して使用することができるといえる。A氏(男性)はほとんどこの形式を使用するが、B氏(女性)は(1)、(2)のような場合でも、丁寧命令の形式を使用する。このことから、命令形(活用形)によって表される命令表現と丁寧命令形によって表される命令表現には位相差が存在することが伺われる。この位相差に関しては、「6. 丁寧命令」で詳しく述べる。

なお、(3)で示すように、共通語の一段動詞系に属する動詞(I-2型動詞)の命令形が、ミロ(見ろ)やオギロ(起きろ)ではなく、ミレ(見ろ)・オギレ(起きろ)になることは、加藤・三井・大西・志村(1988)に、

一段動詞「起きる」の命令形には、オキロの他、オキレが見られる。オキレが用いられるのは、深浦、鰯ヶ沢、板柳、中里、青森の5地点で、このうち西津軽郡に属する前の2地点【深浦と鰯ヶ沢】だけは、オキレ専用だが、あとの3地点はオキロとの併用である。一段動詞レ語尾の命令形は秋田方言で盛んに行われており、西津軽郡のオキ

レはこれと連続するものと思われる。(p. 39)

と述べられている他、此島正年（1968）や日野資純（1955）など、多くの先行研究で報告されている。

加藤・三井・大西・志村（1988）の調査は本稿の調査地点である、大鰐町でも行われている。しかし、本稿の調査結果とは異なり、命令形はオキロのみが行われているとされている。本稿の調査では基本的には、「レ形」を使用するが、場合により、「ロ形」も使用すると回答が得られており、「レ形」と「ロ形」は、待遇性などニュアンスが異なっていることも推察される⁽⁷⁾。

5. 2. 禁止形

共通語で助詞「な」によって表される禁止の表現は、津軽方言においても同型の「ナ」によって表される。

(1) ワモ イルハンデ クスナ（私もいるから心配するな）

(2) アンブネアハンデ カワバダサ イグナ（危ないから川岸へ行くな）

意味的には共通語と同じである。しかし、活用形が共通語（終止形）とは異なり、専用の活用形（禁止形）を持っている。このことについて此島正年（1968）では、

禁止のナは動詞及び動詞的な助動詞を受けるだけだが、共通語ではそれらの終止形を受けて「行くな・起きるな・来るな」となるのに対して、【津軽】方言では、四段活用の語には同様だが、一段活用や変格の語には(起)オキナ・(見)ミナ・(来)キナのように連用形に付くのが、普通で、一見京阪の言い方を思わせるけれども、(中略)【京阪はもともと連用形を受けるのに対し】こちらはオキルナ・ミルナのルが脱落した結果であろうと思う。(p. 156)

と述べるにとどまり、活用形の問題にはふれられていない。ここでは、脱落した結果、形として連用形に後続していると述べられている。しかし、「ル」の脱落としてみるのであれば、「連用形に付くのが、普通で、」とす

るのは問題である。本稿の筆者は坂本幸博（2003）で示したように、禁止形を活用形として設定するので、此島正年（1968）とは立場を異にしている。ただ、「ル」の脱落と見る立場は同じであり、ミルナ→ミンナ→ミナ（*miruna*→*minna*→*mi^hna*→*mina*）のような変化をたどったと考えられる⁽⁸⁾。これは、共通語においても「来んな」、「見んな」等がみられることから推察できる。

次に、疑問の「～ナ」/na/との違いについてふれる。津軽方言では疑問の形式として「～ナ」/na/が存在する⁽⁹⁾。これは基本形に後続することから、I-1, 2 型動詞及びII-2 型動詞では、基本形と禁止形の活用語尾が異なるため、形態上区別される。しかし、I-3～6 型及びII-1 型動詞では基本形と禁止形の活用語尾が同じになるため、形態面からは区別ができない。ただし、アクセントのうえでは区別することができる⁽¹⁰⁾。

●無核語に後続した場合（I-3 型動詞）

- ・*'igū* (行く) → *'igunā* (疑問) 行くか → *'igunado* (+伝聞の助詞「ド」)
- ・*'igū* (行く) → *'igunā* (禁止) 行くな → *'igunado* (+伝聞の助詞「ド」)

●有核語に後続した場合（I-3 型動詞）

- ・*kagu* (書く) → *kagunā* (疑問) 書くか
- ・*kagu* (書く) → *kagunā* (禁止) 書くな

上野善道（1986）では、禁止の「ナ」に関しては、無核語に後続した場合は自ら核を持ち、有核語に後続した場合は、動詞基本形の核をその位置のまま保持するとの記述がみられる。これは本稿の記述と一致している。ただし、疑問の「ナ」のアクセントについては扱われていない。

本稿の筆者の調査では、疑問の「ナ」は、無核語・有核語のどちらを後続させた場合にも、自ら核を持つといえる。ここで問題になるのは、無核語に後続した場合には、疑問・禁止共にアクセント核を持つため、区別することができなくなることである。しかし、その場合にも、さらに助詞を後続させた場合には、両者の間にアクセントの高さの程度による違いが認められる。簡単にいえば、疑問の場合は高くなり、禁止の場合は中程度の

高さになるということである。

また、希望形+ス(丁寧助動詞)+ナ(禁止)で、丁寧な禁止を表す。

(3) アンマス イソギスナ (あまり急がないように)

(4) アンマス オヘアグ ナリスナ (あまり遅くならないように)

此島正年(1968)では、

津軽では禁止をていねいに言うには、助動詞シ⁽¹¹⁾を挿入して行キシナ・起キシナ・見シナ・来シナという形が主として女性に用いられる。(p. 156)

とされている。この記述にあるとおり、B氏(女性)はこの形式を多用するのに対し、A氏(男性)は上待遇などの限られた条件がないと、この形式を使用しない。これについては「6. 2. 丁寧命令形／希望形+丁寧+禁止」で詳しく述べる。

6. 丁寧命令

6. 1. 丁寧命令形

助詞「へ」は丁寧命令形に後続して、丁寧な命令表現を形成する。

(1) ハエアグ イゲへ (早く行きなさい)

(2) ハエアグ オギへ (早く起きなさい)

「5. 1. 命令形」で述べたように、丁寧命令形は女性が多用し、上から下にものをいう場合であっても、女性は丁寧命令形を使用するとの意識があり、A氏・B氏共に、意識の面では女性語と認識している。ここから津軽方言においては、命令形と丁寧命令形との間に明確な位相差が存在することが伺われる。しかしながら、実際の言語運用をみると、A氏(男性)も丁寧命令形を使用し、その場合「和らげ表現」として、意識的に使用している。

(3) コツチャ コイへ コイへ (こっちに来なさい) (A氏から子ども(幼児)に)

これらのことから、命令形と丁寧命令形との間には次のような関係を確認することができる。

	命令形	丁寧命令形
男性	通常使用	和らげとして使用
女性	使用しない ⁽¹²⁾	通常使用

この丁寧命令形について此島正年（1968）では、

津軽でも動詞の命令形にはやや丁寧な言い方がある。すなわち、女性語としての～への形式、たとえばヨミへ・オキへ・ミへ・キへ・シへがある。四段活用・変格活用の場合は命令形にへをつけてヨメへ・コイへ・セへとも言うようだが、これは後の転化で、連用形にへが付くのが本来の形であろう。（p. 126）

と述べている。

このように此島正年（1968）では、連用形に後続する「へ」と命令形に後続する「へ」を同じものとして捉えている。しかし、坂本幸博（2003）で設定した活用体系全体から考察を加えると、これら2つの「へ」は別のものであると考えることができる。

（1'）イグ（行く）（I-3 型動詞）

●希望形（連用形）……………'ig-i-he⁽¹³⁾ {←'ig-i-se（命令形）←'ig-i-su（助動詞基本形）}

●命令形（命令形）……………'ig-e-∅

●丁寧命令形（命令形）……………'ig-e-he（助詞）

（2'）オギル（起きる）（I-2 型動詞）

●希望形（連用形）……………'ogi∅-∅-he {←'ogi∅-∅-se（命令形）←'ogi∅-∅-su（助動詞基本形）}

●命令形（命令形）……………'ogir-e-∅

●丁寧命令形（命令形）……………'ogi∅-∅-he（助詞）

この丁寧命令の「へ」の問題に関わる活用形は、希望形、命令形、丁寧

命令形の3つである。ここでは、動詞「イグ(行く)」と動詞「オギル(起きる)」を例として考察する。

この2つの動詞を選定したのは、共通語での五段系(I-1型, I-3型, I-4型, I-5型, I-6型)と一段系(I-2型)において、命令形と丁寧命令形の活用語尾に違いが認められるためである。(註4【表2】参照)。

(1')では命令形と丁寧命令形の活用語尾が同じであるため、丁寧命令形を特立せずに、丁寧命令の助詞「へ」は、命令形に後続すると説明することができる。しかし、(2')においては、命令形と丁寧命令形の活用語尾が違うため、丁寧の助詞「へ」は、命令形に後続すると説明することはできない。また、(2')では、希望形と丁寧命令形の活用語尾が同じであるため、丁寧命令形を特立せずに、丁寧命令の助詞「へ」は、希望形に後続する、もしくは、この「へ」は助詞ではなく、丁寧の助動詞「ス」が活用し、命令形をとったと説明することができる。しかし、(1')においては、希望形と丁寧命令形の活用語尾が違うために、希望形に後続する、もしくは、丁寧の助動詞「ス」が活用して命令形をとったと説明することはできない。

次にⅡ型動詞の場合を見ていく。此島正年(1968)では、「四段活用及び変格活用の場合は命令形に付く」との記述がみられるが、その場合「Ⅱ-1型動詞 ク ku」が説明できなくなる。此島正年(1968)では、活用体系を共通語の体系で捉えているので、「ク ku」(食う)は四段動詞である。その命令形は「ケ ke」(食え)であるが、それに「へ」を後続させた「ケへ」は「食いなさい」の意味では成立しない。これを、津軽の「ク ku」は変格活用化しているためであると説明しようとしても、「四段活用及び変格活用」と記述されていることから、変格活用化ということで説明することはできない。

次に後続形式の面から、丁寧命令の「へ」を考察する。動詞「カグ(書く)」を例として見ていくと、希望形からは、「カギス」(丁寧)や「カギ

ヘン」(丁寧否定),「カギスタ」(丁寧過去),「カギスナ」(丁寧禁止)と
いったさまざまな形式を後続させることができる。そこから、希望形に後
続している「ヘ」は助動詞「ス」が活用して命令形をとったものであると
考えることができる。

一方、丁寧命令形に後続する「ヘ」は、助動詞「ス」が命令形をとった
ものだと考えると、丁寧命令形(活用形)から「*カゲヘン」や「*カゲス
タ」,「*カゲスナ」のように「ス」が活用した形式が成立しないことを説
明できなくなる。以下、参考として、助動詞「ス」の活用表を簡略化した
形で示す。

ス(丁寧)活用表

語幹	志向形	否定形	希望形	過去形	基本形	禁止形	仮定形	命令形	丁寧 命令形
s-	-a-	-e-	○	-u-	-u-	-u-	-e-	-e-	○

これらのことから、希望形に後続する「ヘ」は丁寧の助動詞「ス」が活
用して命令形をとったものであり⁽¹⁴⁾,丁寧命令形に後続するものは、丁
寧命令の助詞「ヘ」であると、別に考えるべきである⁽¹⁵⁾。

以上、津軽方言の活用体系では、通常の命令形とは別に活用形として、
丁寧命令形を特立するべきであり、助詞の「ヘ」は、丁寧命令形(活用
形)に後続すると規定するべきであると考えられる。そうすれば、I-2
型動詞(一段動詞系)も含めた形で、整合性のとれた説明を与えることが
できる。

6. 2. 丁寧命令形／希望形＋丁寧＋禁止

「5. 2. 禁止形」でふれたように、津軽方言では禁止を丁寧にいうに
は、希望形＋ス(丁寧助動詞)＋ナ(禁止)という形式をとるが、さらに丁
寧にいう禁止の表現が存在する。

- (1) アンマス バスラギヘスナ (あまり騒がないようにしなさい)
- (2) アンマス ノミニ アサギヘスナ

(あまりお酒を飲みに出歩かないようにしなさい)

(1), (2) のように (希望形+ス(丁寧助動詞)+ナ(禁止)) の希望形の部分を「へ」の形式 (希望形+へ, 丁寧命令形+へ) に入れ替えることにより, さらに丁寧な禁止の表現となる。これは完全な女性語となり, A 氏 (男性) はどのような状況でも全く使用せず, B 氏 (女性) もかなり丁寧さを意識したときのみ使用する。

津軽方言において禁止を丁寧という場合には, 「カギスナ」のように, 希望形+ス (丁寧助動詞)+ナ (禁止) の形式をとり, 「*カゲスナ」は成立しないのは「6. 1. 丁寧命令形」でもふれたとおりである。ところが, 次に示すように, 「へ」の後からさらに, 「スナ」という形式を後続させた場合には, 動詞部分の活用形が希望形であっても丁寧命令形であっても成立する。

(1') アンマス バスラゲヘスナ (あまり騒がないようにしなさい)

(2') アンマス ノミニ アサゲヘスナ

(あまりお酒を飲みに出歩かないようにしなさい)

この「スナ」の形式は, ス(丁寧助動詞)+ナ(禁止) であると推測されるため, 「6. 1. 丁寧命令形」において, 丁寧命令形に後続する「へ」は助詞であると規定した以上, 「バスラゲヘスナ」や「アサゲヘスナ」を解釈するには, 助詞に助動詞が後続するということを, 認めなければならなくなってしまう。しかし, これは, 基本には「バスラギヘスナ」や「アサギヘスナ」など, 希望形+へ (助動詞命令形・基本形ス) があり, そこから「アサギへ」と「アサゲへ」等の語形および意味の類似から, 類推で導き出されたものだと解釈できる。

6. 3. 丁寧命令形+へ(助詞)+ンガ・希望形+へ(丁寧助動詞命令形・基本形ス)+ンガ

「6. 1. 丁寧命令形」で述べた2つの形式, 丁寧命令形+へ(助詞) および, 希望形+ス(へ) (丁寧助動詞命令形・基本形ス) に「ンガ」を後続さ

せると、相手を促す表現となる。

- (1) ズブンデ エラ^ンビヘンガ／エラ^ンベヘンガ（自分で選びなさいよ）
- (2) イキテアホズサ イゲヘンガ／イゲヘンガ（行きたい方に行きなさいよ）

相手を促す命令表現は、命令形に助詞「ジャ」を後続させ、「エラ^ンベジャ（選べよ）」、「イゲジャ（行けよ）」のように表現するが、命令形+「ジャ」は押しつけが強い表現となるため、通常促す場合には、「へ」+「ンガ」の形式が使用される。

7. 希求（依頼）

津軽方言の希求（依頼）表現は、過去形（活用形）に「ケ」を後続して形成される。

- (1) コサキテ テズダッテケ（ここに来て手伝ってくれ）
- (2) ソズガワ タナイデケ（そっち側を持ってくれ）

「3. 得られた形式」で示したように、さまざまな終助詞を後続させることが可能である。また、「ケ」と同じく過去形（活用形）に「ホス」を後続させて希求（依頼）表現を表すこともできるが、これは共通語的であり、伝統的な津軽方言では使用されない。

- (1') コサキテ テズダッテホス（ここに来て手伝ってほしい）
- (2') ソズガワ タナイデホス（そっち側を持ってほしい）

また、共通語では「～て」と止めることも可能だが、津軽では「～テ」と止めることができず、必ず「ケ」が必要である。

- (3) ゴ^ンツコロ エサ イデケ（五時頃家にいてくれ）
- (3') *ゴ^ンツコロ エサ イデ（五時頃家にいてくれ）

7.1. 動詞「ケル」との関わり

- (1) アンダモ ミデケ／ケレ／ケロ（あなたも見てくれ）

(2) ヒロサギマ^ンデ イッテケ／ケレ／ケロ (弘前まで行ってくれ)

このように、過去形(活用形)から動詞「ケル(呉れる)」を後続させる表現も成り立つことから、この「～ケ」は、動詞「ケル(呉れる)」の活用形であると考えられることも可能である。しかし、「ケル」はI-2型動詞であり、その活用形において「ケ」単独の形になる活用形が存在しないことから(註4参照)、「テズダッテケ」の「ケ」と「テズダッテケレ(ケロ)」の「ケレ(ケロ)」は、別のものとして考える必要がある。

「テズダッテケレ(ケロ)」は動詞「ケル(呉れる)」が、いわゆる補助動詞として働いたものと考えられることができる。それに対して「テズダッテケ」は、上記のように動詞「ケル(呉れる)」が活用した形ではないため、別に設定する必要が出てくる。

ここでは、この「ケ」を命令形のみの動詞「ケ」として設定⁽¹⁶⁾することにより、この現象を解釈する。動詞「ケル(呉れる)」と比較して、以下の表に示したように活用する動詞であると説明する。

●動詞「ケル(呉れる)」・動詞「ケ」活用表

語 幹	志向形	否定形	希望形	過去形	基本形	禁止形	仮定形	命令形	丁寧命令形
ke{r-, (☆-ø-)}	-a-	☆-ø-	☆-ø-	☆-ø-	-u-	☆-ø-	-e-	-e-	☆-ø-
k	○	○	○	○	○	○	○	-e-	○

このことから考えると、「ケヘ」の形式(カイデケヘ、ミデケヘ)は、命令形のみの動詞「ケ」に助詞「ヘ」が後続したのではなく、動詞の過去形(活用形)に「ケル」がいわゆる補助動詞として後続し、その「ケル」が丁寧命令形+「ヘ(助詞)」、もしくは希望形+「ヘ(助動詞命令形・基本形ス)」の形式をとったと考えるべきである。そうしなければ、例外的に命令形に助詞「ヘ」が後続することを認める必要が出てくる。また、「ケ」を丁寧命令形のみの動詞であると認めてしまうと、「ケ」で終止する形が得られなくなってしまう(【表1】参照)。これらのことから、動詞「ケ」

の活用表は丁寧命令形を空き間にして、命令形のみの動詞であると解釈する⁽¹⁷⁾。

また、「ケヘ」の形式に、6. 3. でも述べた「ンガ」を後続すると、相手を促す表現となる。

(3) ホンコ⁽¹⁸⁾ゴト⁽¹⁹⁾ ヨンデケヘンガ (本を読んであげなさいよ)

(4) イッショニ アソンデケヘンガ (一緒に遊んであげなさいよ)

共通語では相手が自分に何らかの行動を与えてくれる場合には、「やってもらう・やってくれる」となり、自分が相手に何らかの行動を与える場合には、「やってやる・やってあげる」となり、両者は区別される。しかし、津軽方言においてはどちらの場合も「ヤッテケル(やってくれる)」となるため、「ケ」+「ヘ」+「ンガ」で「～あげなさいよ」という表現になる。

	相手から自分	自分から相手
共通語	やってもらう・やってくれる	やってやる・やってあげる
津軽方言	ヤッテケル	ヤッテケル

7. 2. より丁寧な希求（依頼）

津軽方言の通常の希求（依頼）表現は、「ケ」および「ケレ(ケロ)」であり、丁寧な希求（依頼）表現は、「ケヘ」である。しかし、それ以上に丁寧に依頼する表現も存在する。

(1) ハエァグ キテケネ(ベ)ガ／キテケラエネ(ベ)ガ

(早く来てくれない(でしょう)か)

(2) コズモ カッテケネ(ベ)ガ／カッテケラエネ(ベ)ガ

(こっちも買ってくれない(でしょう)か)

「～ケネ(ベ)ガ」は、共通語訳で示すとおり、「～てくれない(でしょう)か」となる。「ベ」は着脱可能であるが、付けた方がより丁寧さが増す。「～ケネラエ(ベ)ガ」は、「～ケネ(ベ)ガ」に可能の「エル⁽²⁰⁾」が付

いたことにより、さらに丁寧になり、「～てくれることはできない（でしょう）か」となる⁽²¹⁾。

8. ま と め

結論として以下の点が明らかになった。

- ①津軽方言では、動詞の活用形として、命令形と丁寧命令形とを別に設定すべきである。
- ②津軽方言では、動詞の活用形として、禁止形を（基本形とは別に）設定すべきである。
- ③丁寧命令を表す「へ」は、前接する活用形の違いから、丁寧の助動詞「ス」が活用して命令形をとったものと、助詞「へ」とを別に設定するべきである。
- ④希求（依頼）を表す「け」は、命令形のみの動詞であり、活用の型はI-2型動詞に分類される。
- ⑤丁寧命令形は女性語と意識されているが、実際の言語運用としては男性も使用する。その際には、「和らげ表現」として使用される。

註

- (1) 本稿では希求と依頼の違いについては扱わない。
- (2) 阪田雪子（1989）で示されている共通語の形式は以下の通りである。

●命令として

1. 語の意味にゆだねるもの、2. 活用語の命令形を用いたもの、3. 活用語の終止形によるもの、4. 活用語の連用形＋た、5. ～なさい／お～なさい、6. ～たまえ、7. ～ないか、8. 文末（終止形）＋こと

●禁止として

1. 活用語の連体形＋な、2. ～じゃない、3. ～てはいけない、4. ～なさん、5. 反語的な用法

●依頼として

1. 語の意味にゆだねるもの、2. ～てくれ／～てください／～て頂戴、3. 活用語の連用形＋て、4. ～ておくれ、5. ～てくれたまえ、6. お～く

ださい, 7. ～ていただきたい, 8. ～てくれないか／～てくれませんか／
～てくださいませんか, 9. ～てもらえませんか／～ていただけませんか
／お～願えませんか

- (3) 津軽方言において命令表現に関わるものでは、本稿で扱ったもの以外に、以下の4つの形式が存在する。

- (1) ナガ・ネガで表されるもの

カガナガ (+ヤ／ノ), カガネガ (+ヤ／ノ), カギスナガ (+ノ)

- (2) 断定で表されるもの

カグンダ (+ヤ)

- (3) 断定の否定で表されるもの

カグンデネァ (+ヤ)

- (4) 義務で表されるもの

カガネァバ (+ノ)

これらのものに関しては稿を別に述べる。

- (4) これら待遇性および地域差に関わる事象は、稿を別に述べたいと考えている。

- (5) 津軽方言においては、このような勧誘型の命令表現は使用されない。

- (6) 【表2】として、(1) I-1 型動詞から (8) II-2 型動詞までの活用表を簡略化した形で示す。なお、語幹末の子音が交替した場合の活用語尾との対応を、☆の有無ならびに数で示した。

- (1) I-1 型 'a_{ga} アガル (上がる)

- (2) I-2 型 'a_{ge} アゲル (上げる)

- (3) I-3 型 'i_{no} イノグ (動く)

- (4) I-4 型 'a_{so} アソブ (遊ぶ)

- (5) I-5 型 mazu マズ (待つ) (語幹末/z/は/u/の場合。/d/は/a～e/の場合。)

- (6) I-6 型 'u_{zu} ウズス (移す)

- (7) II-1 型 ku ク (食う)

- (8) II-2 型 kuru クル (来る)

【表2】

	語 幹	志向 形	否定 形	希望 形	過去 形	基本 形	禁止 形	仮定 形	命令 形	丁寧 命令形
(1) I-1 型	'a _{ga} {r-, (* _Q -, ** _g -)}	-a-	** _{-g} -	-i-	* _{-g} -	-u-	** _{-g} -	-e-	-e-	-e-
(2) I-2 型	'a _{ge} {r-, (* _g -)}	-a-	* _{-g} -	* _{-g} -	* _{-g} -	-u-	* _{-g} -	-e-	-e-	* _{-g} -
(3) I-3 型	'i _{no} {g-, (* _i -)}	-a-	-a-	-i-	* _{-g} -	-u-	-u-	-e-	-e-	-e-

(4) I-4 型	'aso{ \tilde{b} -, ($\tilde{*}$ N-)} }	-a-	-a-	-i-	$\tilde{*}$ - \emptyset -	-u-	-u-	-e-	-e-	-e-
(5) I-5 型	ma{z-, d-, ($\tilde{*}$ Q-)} }	-a-	-a-	-u-	$\tilde{*}$ - \emptyset -	-u-	-u-	-e-	-e-	-e-
(6) I-6 型	'uzus-	-a-	-a-	-u-	-u-	-u-	-u-	-e-	-e-	-e-
(7) II-1 型	k-	-a \emptyset -	-a \emptyset -	-u'i-	-uQ-	-u \emptyset -	-u \emptyset -	-e \emptyset -	-e \emptyset -	-u'i-
(8) II-2 型	k-	-ura-	-o \emptyset -	-i \emptyset -	-i \emptyset -	-uru-	-u \emptyset -	-ure-	-o'i-	-o'i-

- (7) 註(4)に同じ。
- (8) この変化は大西拓一郎(1995)及び小林隆(1996)において示されている、否定形の場合に「ラ」が脱落する過程として説明されている、取る: to-ran ε >tonn ε >to'n ε >ton ε のような変化と同じような説明を与えることができると考えられる。
- (9) 津軽方言においていわゆる疑問詞と捉えることができるものは、「ガ」, 「ナ」, 「バ」の3種類である。ここでは、それぞれの違いを詳しく述べることはしない。
- (10) 津軽方言のアクセント体系に関しては上野善道(1977, 1989)を参照。
- (11) ここで、助動詞シとされているものは、本稿の丁寧の助動詞スと同一のものである。此島正年(1968)では、シとスをシに統合しているのに対し、本稿ではスに統合しているため、このような違いが生じている。筆者が、シとスをスに統合していることに関しては、坂本幸博(2003)を参照。
- (12) 女性であっても、かなり強い怒りの感情を持って、上から下にものをいう場合には、命令形を使用することもある。しかし、それはよほどの場合である。
- (13) 津軽方言においては、「セ」が「ヘ」に変化する現象がある。
 (例) セナガ(背中)→ヘナガ, アセ(汗)→アヘ, オギセ(起きなさい)→オギヘ
 しかし、全ての語において起こるわけではなく(セメル(攻める)→*ヘメル), 発生条件など詳しいことは明らかではない。
- (14) 北条忠雄(1975)に「津軽のエギヘはエギスの命令法で、このエギスはイキモス<行き申す>に由来する。」(p. 169)との記述がある。ただ、ここでは丁寧命令形(共通語の活用形でとらえている場合は命令形)との関わりについては記述されていない。
- (15) 丁寧の助動詞「ス」と丁寧の助詞「ヘ」との間には後続する要素の違いが認められるが、助動詞「ス」が命令形をとり、「ヘ(活用)」となった場合には、助詞「ヘ」との間に後続する要素の違いはなくなり、一部のいわゆる終助詞を後続するのみである。
- (16) この命令形のための動詞「ケ」は、意味的側面および形態的側面から、「ケル

(呉れる)」の変種であるとして、I-2 型動詞に帰属される。なお、坂本幸博 (2003) で調査対象とした動詞 1026 語には、この「ケ」は含まれていない。

- (17) こまつひでお (1999) では、共通語の「くれ (呉れ)」が以下のように解釈されている。

クレヨという語形が、日本語話者の直覚で、{四段活用動詞クレルの命令形+助詞ヨ} という結合として反射的に分析され、その分析に基づいて使用されているとしたら、動詞クレルを独立の活用形として特立せずに、未然形から仮定形までは下一段活用として、また、命令形は四段活用として使用されていると認めればよい。図示すれば下表のようになる。この場合、活用の異なる二つの動詞なのか、相補分布の関係にある一つの動詞なのかというたぐいの議論は不毛である。

語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形	活用型
く	れ	れ	れる	れる	れれ		下一段活用
く						れ	四段活用

(p. 147)

- (18) この「コ」は、いわゆる指小辞とされているものである。詳しくは日野資純 (1958) および此島正年 (1968) を参照。
- (19) 津軽方言のヲ格には、 \emptyset (ゼロ)、バ、ゴト、ゴトバ、の 4 種類があり、基本的には \emptyset で表される。しかし、使役形の場合などでは、他の 3 種類で明示する必要がでてくる。本稿ではそれぞれの違いは述べず、ゴトで代表させる。
- (20) 共通語の「受け身・尊敬・自発・可能」の助動詞「れる・られる」は、津軽方言では、いわゆる r の脱落が起こり、「エル」として実現する。この現象に関しては、此島正年 (1968) および、井上史雄 (1981) を合わせて参照。
- (21) 註(4)に同じ。

引用文献

- 安達太郎 (2002) 「命令・依頼のモダリティ」(『新日本文法選書 4 モダリティ』くろしお出版)
- 井上史雄 (1981) 「荘内方言の r 脱落にみる形態変化の近代史」(東京外国語大学論集 31)
- 上野善道 (1977) 「日本語のアクセント」(『岩波講座日本語 5 音韻』岩波書店)
- (1986) 「青森市動詞のアクセント」(『日本海文化』13)
- (1989) 「日本語のアクセント」(『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻 (上)』明示書院)

- 大西拓一郎（1995）「岩手県種市町平内方言の用言の活用」（『国立国語研究所報告 110 研究報告集 16』秀英出版）
- 加藤正信・三井はるみ・大西拓一郎・志村文隆（1988）「青森県津軽地方の方言調査報告」（『日本文化研究所研究報告別巻第 25 集別刷』）
- 小林隆（1996）「動詞活用におけるラ行五段化傾向の地理的分布」（『東北大学文学部研究年報』45）
- 此島正年（1968）『青森県の方言』（津軽書房）
- こまつひでお（1999）「日本語進化のメカニズム——環境への適応としての言語変化——」（『国語学』196）
- 阪田雪子（1989）「依頼・要求・命令・禁止の表現」（『講座日本語と日本語教育 4 日本語の文法・文体（上）』明示書院）
- 坂本幸博（2003）「津軽方言の動詞活用体系について」（『国語学』212）
- 佐々木隆次（1988）「青森市方言文末詞の考察」（『此島正年博士喜寿記念国語語彙語法論叢』桜風社）
- 日野資純（1955）「津軽方言の文法に関する一考察」（『国語学』20）
- （1958）「青森方言管見」（『国語学』34）
- 北条忠雄（1975）「1. 北海道と東北北部の方言」（『方言と標準語——日本語方言概説』筑摩書房）

（さかもと ゆきひろ・関西学院大学大学院奨励研究員）